

救いと救いの確認

使徒信条 n お第三条を説明するルターは興味深い表現を使います。「私は... 主イエス・キリストを信ずることが... 出来ないことを信じます。」 一見矛盾のように聞こえますが、とても大切な真理を語ります。とは、信仰は人間の理性や能力や決定や行動などによって生まれるものではない事をルターは強調します。救いをもたらせるキリスト信仰は聖霊様の働きによって始めて生まれるものです。



私はこの真実が救われた日の次の朝によく分かりました。その過程を少し証しさせていただきます。

私は 1944 年に 6 人兄弟の 4 人目として信仰の家庭に生まれました。そして間もなく幼児洗礼を受けました。小さい時から神様の話やイエス様の話をよく聞かされました。日曜日学校や礼拝によく通いました。しかし、中学校時代に自分の現実と社会の現実が説教の中に聞いている聖書の教えと余りにもかけ離れている事に気が付きました。自分が罪深い存在である事が益々分かりだしました。その反面によい暖かい家庭、親しい友達、学校での成功などの事が分かりきった事ではなく、神様の私に対する愛の表れとして感じ始めました。神様はそのよい事柄を通して私を招き始めました。母が私の心の動きを案じて、色々信仰のよい本を私に読むように渡し、それらを読むほどに読み始めました。

15 歳の時から上の兄弟姉妹と一緒に教会の青年活動に参加し始めました。個人的な信仰を持つ他の若者と自分の状態を比べると、自分には何か大切なものが欠けていたような気がしました。彼らが持つ喜びや平安が私にはなかったからです。羨ましくなって、私も本物のクリスチャンになりたいと願う気持ちが益々強くなりました。そして、1960 年の正月にキリスト者になる事を決めました。と言うのは、クリスチャン青年がしている事と同じ事をしたらクリスチャンになると誤解していたので、彼らの真似をし始めました。

彼らがやっていた事柄は聖書を読む事、お祈りをする事、教会の集会に参加

する事、証しする事、道徳的に正しく生きる事でした。それらを真剣に、全力を出して、やりだしました。聖書を毎日3章ずつ読む事は何の問題もありませんでした。教会の諸集會に一週間に8回も出席する勢いでクリスチャン青年の交わりを楽しみました。祈りの方はかなり苦痛でした。5分祈ったらもう限界と何回も感じました。本物の祈りは聖霊によるものですから、聖霊様がまだ心の中に入っていなかった時に祈る事は辛い義務に過ぎませんでした。証しも大変な挑戦でしたが、一ヶ月半経つとある青年たちの集會で初めて口を開いてイエス様の証しをしました。まだイエス様を知らなかったのに、皆の真似をしました。しかし、最も難しい事はやはり正しく生きる事です。聖書を読めば読むほどイエス様の道徳的な要求の厳しさにぶつかって、自分の心のどうしようもない罪深さが益々明らかになりました。頑張れば頑張るほど絶望の沼に沈んでしまいました。「どうして私がクリスチャンになれませんか。他の青年に出来るのに、どうして私が何時も罪を犯して、罪の奴隷でしょうか。どうして私には喜びや平安がないのでしょうか。」

半年以上の一生懸命な努力の結果、絶望の余りに至りました。神様を信じる信仰さえ失いかけていました。丁度その時期に堅信礼を受けるために2週間の教育キャンプに100人の他の15歳の男女と一緒にある島のキャンプ場に行きました。ルターの小教理問答やその他の聖書の学びを中心とするとても楽しいキャンプでしたが、私の心は罪意識や罪責感で一杯、又自分が絶望的な人間だと言う気持ちで一杯でした。あるキャンプファイヤーの時に牧師がイエス様の十字架の血潮による罪の赦しの話しをしました。その時に神様に向かって心の中に次のようなお祈りをしました。

「神様、あなた様がいらっしゃるかどうかさえ分からなくなりましたが、もしいらっしゃるなら、私を助けて下さい。私のところに誰かを送って下さい」と言う不信仰の祈りでしたが、しかし正直な祈りでした。

あの当時のキャンプでは宿泊はテントで行われましたが、私には一人用のテントがあって、夜の10時前にもう既に寝袋に入ろうとした所にキャンプのあるリーダーが現れて、私に次のような言葉を言いました。「あなたは確かにいい子ですが、あなたの心の中にまだイエス様が入っていないから、今入れるように祈ってもいいですか。」私は涙で頷く以外には何もいえませんでした。あの方はお祈りをして帰りました。それから10分後ですべてのリーダーが集まって、眠る前の賛美歌を歌ってくれました。その内容は天国についてでした。罪のない、幸せの国についてでしたが、その時に主の聖霊様が私の心に入って下さい

ました。心の思い荷物が何処かに転がって、何ともいえない平安に包まれて静かに眠ってしまいました。次の朝起きると心から喜びの泉のようなものが湧き出て、自然の緑が何とも言えないほど美しく見えて、鳥の綺麗な鳴き声に始めて気が付いたような時でした。その時にキリスト信仰が自分の理性や能力によって生まれるのではなく、聖霊様からの大きな贈り物、プレゼントである事が分かりました。ルターの教えとピッタリの体験を致しました。

聖霊様を頂くと信仰が与えられます。しかし、その事は人間の業ではなく、神様ご自身がなさって下さる業ですから、奇跡で、自分に起こった事は確かですが、それを説明できません。聖霊様の奇跡です。ただ、その奇跡はどのような環境や状況の中に起こりうるかは、イエス様はニコデモにヨハネの 3 章の中に説明して下さいました。それは、イエス様のみ言葉に心を開いている時に起こります。又イエス様の十字架と復活のメッセージを聞いているところに起こり得ます。

信仰が聖霊様のみ業によるプレゼントなら、どうしてある人々が信じないのですかと言う質問が当然出るでしょう。信仰は神様のみ言葉の招きに答える形で生まれますが、その招きを拒否する事が出来ます。しかし、神様の招きがなければ、人間が自分の力で信じる事が出来ません。神様の招きの時をも勝手に選ぶことも出来ません。神様のみ声を聞く時は人生で最も大切な恵みの訪れの時で、それを見過ごせば、救いのチャンスを失って、自分自身に裁きを招く結果になります。

主イエス・キリスト様に出会った事はどうしようもない罪の奴隷で、罪責感で悩んでいた私の所にイエス様ご自身が訪れて下さって、その聖霊様を与えて下さって、私の心に罪の赦しの平安と喜びとを注いで下さいました。思いがけない恵みによって、私の為に十字架の上でその尊い血潮を流して下さいましたイエス様に出会いました。しかし、その後はどうだったのでしょうか。

明確に救われたと分って、喜びに満ちた一日の後で、罪を犯してしまって、折角の平安と喜びは宙に浮いた年金と同様に一瞬の内に消えてしまいました。大変がっかりしました。又必死に祈って、イエス様に赦しを願って、やっとの事で平安が戻りましたが、以前のような大きな喜びはもうありませんでした。自分自身の中に依然として罪深い性質がある事に気がつきました。しかし、イエス様がきよいお方で、罪を憎んでおられると分ったから、私が罪との戦いに本腰で挑戦しました。

しかし、その戦い方は基本的に間違っていました。救いはイエス様の一方的な恵みであることがよく分りましたが、救われた者として、自分で正しい生き方をしなければならぬと誤解しました。ですから、私のところまで来られて、いつも共におられるキリスト様から目を離して、自分の努力や自分の状態に目を向けました。しかし、それは電源から離れた電気機関車を自分の体力で動かそうとするとよく似た大変な事でした。自分の力で神様の律法を守ろうとする努力は本質的に救われる前と救われる後は同じような無理な頑張りに過ぎませんでした。いつも罪の誘惑に負けて、頑張っても、頑張っても、自分の罪と罪深い欲望や習慣的な罪から自由になりませんでした。

しかし、イエス様に出会った覚えがあって、繰り返して、イエス様の元に罪の赦しを求めに戻りました。又繰り返してイエス様も赦しの平安を与えて下さいました。しかし、このような律法の前で頑張るとすごく疲れる場合があります。また、少しずつ、平安に戻る時間的な距離が長くなりました。そこに悪魔は隙間を見て、すごい攻撃に出ました。それは、救いの確信についての戦いでした。「こんなに同じ罪を繰り返すあなたは、もう何のクリスチャンでもなく、もう辞めて、信仰を捨てなさい」と強く迫ります。しかし、幸いにイエス様の聖霊様は私の心から離れていなかったから、聖書のみ言葉を頼りにして、いつも新しい悔い改めに私を導いて下さいました。明確な救いの体験の記憶も助けになりましたが、人にイエス様の証をしながらも、悪魔は「あなたは偽善者です。自分でもまともなクリスチャンでないのに、何で人に証をするのか」と迫りました。

このような中で、とにかく神様に愛されている証拠を求めるようになりました。よい家庭があって、よい友達も、好きなガールフレンドも、高校生活の成功も、教会の青年会の楽しい交わりも、私の一種の拠り所になってしまいました。しかし、この様な戦いが4年間も続いたから、ひどく疲れしました。しかし、今から考えれば、神様がこのような戦いも許した理由がありました。それは、自分自身の罪深さがいかに深いか、又自分の力でどうしようもない現実である事を徹底的に教えて下さった事でした。

二十歳の頃、徴兵制の軍隊生活に入らなければならぬ事でした。そしてある日に、家から500キロ離れた場所で、主は私の間違った安心感の頼りをいっぺんに取り除いて下さいました。それは、私が重い心臓病にかかって、死にそうになって、1年間の病院生活を過ごさなければならぬ事でした。成功も、友

達も、家族の支えも、死の恐怖の前に何の役にも立ちませんでした。又自分の気持ちを高めようとする努力も病気の疲れの中に全く不可能になります。「神様、あなたの愛は何処に消えたでしょうか」と嘆きながら祈っていました。

そこにやっと答えが出てきました。「私ですよ。あなたの為に十字架の上に死んで、蘇っている私がずっとあなたと共に来たのですよ。今からあなたが死んでも、その時もあなたと共にいますし、その後も共にいますよ。」

私の頑張りではなく、ただ主イエス・キリスト様だけが答えでした。十字架の愛が見えてきました。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられま
ず（現在形）。」（ローマ 5:8）

そして、退院して車で家に向かっていたある時、ルターの事がある本で読んでいた際、一つの言葉が強い力で私の目に飛びました。それは、「イエス様の十字架の血潮は十分です。」私の救いの確信は私の何かに頼るのではなく、一方的な恵みに寄ります。はるかかなたに消えたような神様の大きな平安と喜びが戻ってきました。「私ではなく、あなたです！」

それからの罪との戦いの中に、目を主に向けて、たとい私が倒れても、主のみ手の内に倒れるから、もう一度立ち上がります。私の歩みは私次第ではなく、イエス様次第と分って、気持ちがすごく楽になりました。